

「イエスの最後を囲む人々」

マルコ15:33~47

- 1、マルコ福音書の著者は「イエスの死」を、暗黒の宇宙的大事件として記す。「神殿の垂れ幕が真っ二つに裂けた」(38)とは古いユダヤ教の神殿秩序の破壊、祭儀の終焉、律法の権威の止揚を示す。
- 2、イエスの最後の言葉「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」(33、詩篇22篇2節の冒頭)の言葉は議論の多いところだ。①イエスが語ったのではなく、後世受難物語の生成や伝承段階でイエスの言葉として後で入れた。②イエスは最後に神への絶望をのべたのだ。③詩篇22篇は最終的には神への信頼の詩編だから、信頼の表明が途中でとぎれた。一貫して神に委ねるイエスの表白の一部だ。主として神学的な見方。
- 3、「イエスという経験」の大貫隆氏と「イエス—その逆説の生涯」の笠原芳光氏との往復書翰(『福音と世界』09/4)では、共にイエスの最後を「イエスの絶叫」と捉える点は一緒であるが、大貫さんは「神への懸命な問い」だと理解し、笠原さんは「意味不明は叫び」だと捉え、その叫びにこそ「深い慰めがある」と言う。
- 4、今日の主眼は、イエスの最後の「絶叫の叫び」の方ではなく、この最後を取り囲む人々の方に眼を止めたい。①、「本当に、この人は神の子だった」(39)との信仰告白は、イエスの死刑を執行したローマ軍の百人隊長だと言うこと。百人隊長は実力のある軍の指揮官。この告白はマルコの他の二つの告白と関連している。イエス受洗の際の「あなたはわたしの愛する子」(1:10)。山上の変貌の「これはわたしの愛する子」(9:7)。この二つはマルコの「神の子」宣言。これを、百卒長が繰り返すのがマルコの特徴(大貫)。ユダヤ民族主義の破綻を象徴する異邦人、そして軍の価値観(皇帝への忠誠)をもつ軍人の告白。イエスの最後を囲む人々の鮮烈さがあります。②、「婦人達も遠くから見守っていた」(40)。マグダラのマリア、少ヤコブとヨセの母ヤリア、そしてサロメの存在の大きさ。「彼らはイエスがガリラヤにおられたとき。イエスに従って世話をした人々である」(41)。離れがたい心の痛み、悲嘆、関心、心遣い、興味、待機、などを象徴している。
- 5、イエスへの信仰告白はいろいろな人によってなされ、多様である。ユニゾンではなくコーラスである。パウロは「十字架につけられ給いしままなるキリスト」(ガラ3:1文語)が各人に示されているという。各人の告白が大事だ。
- 6、阪神淡路大地震で再建された兵庫松本通教会の会堂への光の取り入れかたに感動を覚えた事がある。上よりの光が、プリズムで白木の聖餐台にあたり虹の光(神からのノアへの祝福を象徴)を放つ。イエスの十字架の死を囲む人々の告白の多様さを思わせる。赤外線、紫外線もある。目に見えないがイエスの死を見守る。すでに挫折してしまっていた男性の弟子も、イエスの死後に登場するくアリマタヤのヨセフもいる。人はそれぞれ自分のありのままの姿でイエスを告白・証しすればよい。